

小学校部会

I 研究の目的

香美・香南支部では、運動好きな子どもを育てるためには、「運動が楽しい」「運動の仕方が分かる」ということが大切であると考え、「楽しい できた またやりたい ～次への意欲を持って運動や仲間と豊かに関わろうとする子どもの育成～」として、研究と実践に取り組んでいる。その中で、目指す子ども像に迫るための有効な手立ても明らかとなってきた。本研究では、得意・不得意が顕著に現れがちなボール運動領域において、対象の運動の特性や魅力を踏まえた上で、適切な手立てを講じることの有効性について探ることを目的とする。

II 研究の仮説と手立て

【仮説】

ボール運動の本質的な特性や魅力に触れさせ、一人一人が達成感を味わえるような授業づくりを行うことができれば、次への意欲を持って、運動や仲間と豊かに関わろうとする子どもの育成につながるであろう。

仮説検証のための手立てとして、

- ①言語活動の設定
- ②運動の特性に応じた動きづくり
- ③教材・ルールの工夫
- ④フィードバック（振り返りと評価）デザイン

の4点を意識して行った。

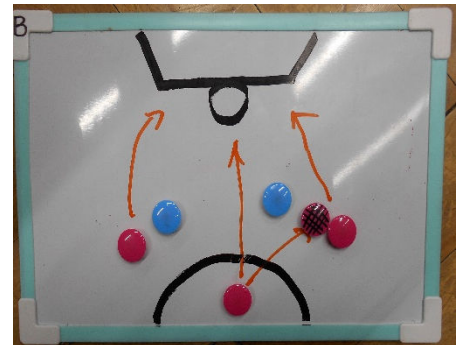
【手立て①】言語活動の設定

○チームでの話し合い活動を活発にするために、ゲーム①とゲーム②の間に、作戦タイムの時間を第2次から設けた。作戦タイムでは、ホワイトボード、色付きマグネット、コート部屋の図など、話し合いの際に活用できる道具を準備した。これらを使用することで、動き方がイメージしやすくなり、対話が充実することをねらった。

＜チームに分かれての作戦タイム＞



＜使用した作戦ボード＞



【手立て②】運動の特性に応じた動きづくり

○バスケットボールに必要な技能の習得を目指すために、毎時間の準備運動（チームドリル）として、ドリブル練習（1分）、パス練習（1分）、シュート練習（1分）、3対1パスゲーム（45秒×4）を行う。



チームドリブル

リーダーの指示によってドリブルする手を変える。



パス練習

ペアでパスを出し合う。
(チェスト・バウンドなど)

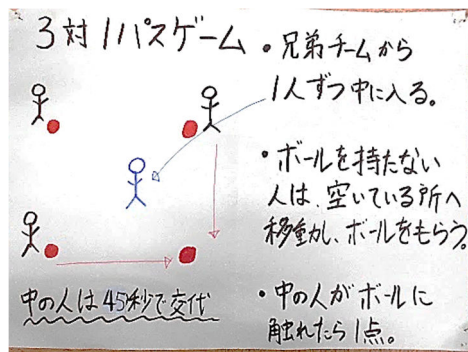


シュート練習

どの位置から投げるとゴールしやすいか試してみる。



3対1 パスゲーム



3対1パスゲームでは、数的優位を意識させるため、常にボール保持者の両隣に動くように意識させた。守備側は、ボールに対してプレスをかけ続けるようにさせることで、出し手側の技術の向上を図った。守備側がボールをカットした回数分、チームにポイントが加算されるようにすることで楽しみながら技能を高めていくことができたようにした。

【手立て③】 ルールの工夫

○本学級には、ボール運動を苦手とする児童も多くいる。仲間との関わり合いを大切にしながら、誰もが楽しく安心してゲームに参加できるようにするために、以下の2つのことを行った。

(1) チーム全員がシュートを決めたらボーナスポイントとして20点加算した。

ゲーム開始時には、全員帽子を白にしておき、ゲーム時にシュートが成功したら帽子を赤に変える。ゲーム終了時チーム全員の帽子が赤になっていたらボーナスポイントとして20点をゲットできる。こうすることで、シュートが苦手な児童にもボールに多く触れる機会が与えられると考えた。

(2) ルールや練習方法について話し合う場を設定した。

授業後の業間時間や朝の会・帰りの会の時間を使って、振り返りと合わせてルールや練習方法について話し合う時間を設定した。ボール運動が苦手な児童も、意欲的に参加できるための練習の仕方などを考えることで、全員が参加できるようなゲームの在り方を確認し合うことができた。

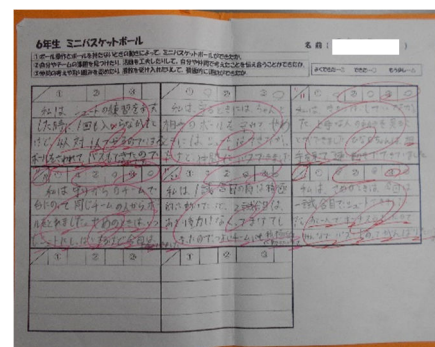
【手立て④】 フィードバック（振り返りと評価）デザイン

○体育授業での学びが喜びを実感できるようにするために、動きの伸び、学び方の高まりなど、自他のよさや頑張りを振り返る時間を設定した。振り返りシートを活用し、前時までの学びを確認しながら振り返ることができるようにした。

<チームでの振り返りタイム>



<使用した振り返りシート>



Ⅲ 研究の実践

【第1次】オリエンテーションとボールタッチ調べ（第1・2・3時）

第1時で単元の目標や、授業を通して大切にしてほしい仲間との関わりを確認した。その後、基本的なルールやファウル、チームドリルの流れなどを確認し、ドリブルとシュートの練習、3対1パスゲームを行った。

5年生までに行ったハーフコートバスケットボールの経験を想起し、「シュートが決まらない」「パスが回らない」「飛んでくるボールが怖い」などの課題が出された。それらの課題を解決するために、第2時からは3対2のハーフコートゲームをし、その中でボールをよく触っている人の動きを分析する「ボールタッチ調べ」を行った。

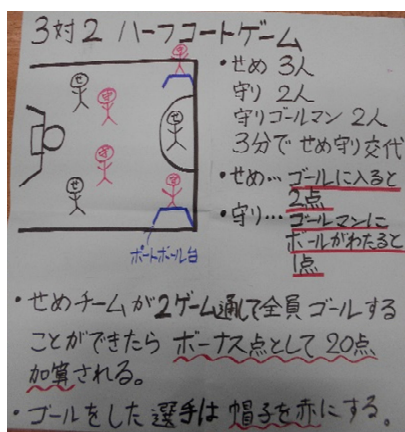
◎ボールタッチ調べ（①予め、チーム同士でボールタッチの回数を数える相手を決めておく。②3対2のゲーム中、コートに入っていない控えの選手は味方のボールタッチの回数を数える。③1分ごとにコートに入る選手が交代し、全員のボールタッチ数が数えられるようにする。④攻守を入れ替え②③を繰り返す。）
ボールのタッチが多い人はどんな動きをしているのか全体で考えた。その結果、以下のポイントが出された。

- ・ひたすら動いていた。
- ・ボールに怖がらず、進んで取りに行こうとしていた。
- ・パスが出されたら、前に走って出ていた。
- ・一人一人、ボールを持っている時間が短かった。すぐにパスを回していた。
- ・声を出し合っていた。 など

ボールタッチ調べを行う中で、チーム内で活躍している子の動きを見ることができた。そうすることで、いい動きをしている児童をまねしようとしたり、児童同士でアドバイスをし合ったりする姿が見られた。

【第2次】全員がシュートを打つための作戦を考える。（第4・5・6時）

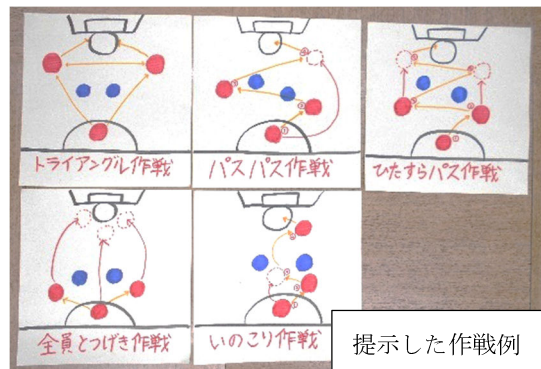
第4時から、守備側ゴールマンありの3対2のハーフコートゲームを行った。



◎守備側ゴールマンありの3対2のハーフコートゲーム

攻撃側にのみ得点をとれる機会があるゲームでは、守備側はその時間に関しては守りに徹するのみにになってしまう。そこで、守備側の児童をハーフライン上に置いたポーンボール台に立たせ、その児童にパスが回れば1点入るというルールを設定した。このルールによって、守備側にも得点を取れる機会が生まれ、必死に守る姿が見られた。オールコートで試合をすることを見据えて、攻守の切り替えも意識することができた。

第4時から、【手立て③】（1）のボーナスポイントルールを取り入れた。そうすることで、チーム全員がシュートを成功させるための作戦を積極的に考えることができた。第5時では、作戦を立てる際のヒントとして、第4時で児童が考えた作戦と教師が用意した作戦例を黒板に提示した。その中から自分たちのチームの課題に合った作戦を選び、実際にどのように動くか話し合うことができた。



◎作戦タイム

コートの図が書かれたホワイトボードと色付きマグネットを使って、積極的に話し合う姿が見られた。お互いの動きや考え方を認め合うことや、自分の考えを積極的に伝えることを意識させた。自分の考えを伝えることを苦手としている児童が、積極的に話そうとしている姿が見られた。授業を重ねるたびに、積極的に話し合っているチームが増え、作戦タイムに対しても意欲的に行う児童が増えた。

ゲームの回数を重ねるたびに、ボーナスポイントを獲得することができたチームの数が増えていった。また、ゲーム終了後には、赤帽子に変わっている児童の数も明らかに増えた。全員がシュートの成功を目指すことができた。

【第3次】作戦を活用して対抗戦を行う。(第7・8時)

第7時からは、これまでに身に付けた技能や作戦を生かして、オールコートでの試合を4対4で行った。4対4でもボーナスポイントのルールを設定して行った。作戦タイムでは、今まで行ってきた3対2のゲームとは違い、攻撃側の一人一人に守備側の選手がマークしてくるので、より作戦を考える必要が出てきた。また、総当たりの試合にしたことで、初めて試合をするチームに対しても、相手チームの動きを分析し、相手によって作戦を選び直したり、話合って変えたりするチームの姿も見られた。最後の第8時では、前回までシュートを成功させることができなかった児童が、初めてシュートを成功させることができた。チーム内でも賞賛され、達成感を味わうことができていた。

児童の振り返りより (一部)

○ぼくは今日初めてシュートが決まりました。今までの練習でやったことが試合で出せました。チームの仲間もほめてくれたのでとてもうれしかったです。みんなで考えた作戦が成功したので良かったです。次もがんばってシュートしたいです。

○今日のゲームでは、ボールに3回さわられて、昨日よりさわることができて良かったです。ボールをよくさわっている人は、積極的に動いていて、ボールを怖がっていない感じがしました。もっとシュート練習などで、入れられるようにがんばりたいです。

○今日は、チームで作戦を立てて、ボーナス点を確実に取りに行くことを目標に決めました。そして、ボーナス点を取ることができて良かったです。でも、守りのときの作戦を立てていなかったもので、次の試合では、守りの時の作戦も立てたいと思いました。

○今日は、たくさん点を取りにいかうとして、体を動かすことができたと思います。チームの〇〇君や△△さんがいろいろなところに行って、ボールをもらおうとしていたので、ぼくもまねしていきたくてと思いました。

○今日は、前回パスがあまりできなかったもので、そこを注意してがんばりました。すると、前回よりもパスを回すことができたので良かったです。ボールをよくさわっている人は、パスもどんどん回していたので、ぼくもいいパスを出せるようにがんばりたいです。

IV 研究の結果と考察

11/20(金)に行われた学体研の代替公開授業では、香南市立野市小学校の6年生がミニバスケットボールの授業(5/8時間目)を公開した。実践授業では、子どもたちが意欲的に活動する姿や、「いいぞ!」「ナイス!」といった前向きな声掛けなどを行いながら仲間と積極的に関わろうとする姿が見られた。一方、チームによっては、作戦の立て方があまり理解できていなかったり、運動能力の差が生じ作戦通りのプレーを行うことが難しかったりするという課題も出てきた。事後研究会では、参観者によるグループ協議、山本儀浩小体連会長による講話が行われた。

①成果

- ・作戦ボードやマグネットなどの言語活動の充実のための手立てがなされていたことにより、グループでの話し合い活動が活発に行われていた。
- ・作戦タイムとチーム練習の時間が十分に確保されていた。
- ・運動量の確保が補償されている授業の流れになっていた。
- ・児童がゲームに積極的・意欲的に取り組むことができていた。

②課題（●）と今後の改善策（→）

●数的優位の状況を作るといふ狙いは分かるが、めあての「2対1の状況を作ろう」が児童にとって分かりにくいものだった。

●児童の数的優位への意識が弱く感じた。

→3対2の時点で数的優位の状況はできている。何を狙いにして授業を展開していくか考え、めあてを設定する必要がある。課題を絞って教師が見取ることも必要になる。

狙いを数的優位の状況を作り出すことに絞るのであれば、オールコートでの4対3のゲームでよい。

●作戦タイムでは、「数的優位をどう作るか」よりも「どうやってボーナスポイントを取るか」の話し合いになっているチームがあった。

●作戦タイム中に何について話し合うか分かっていないチームがあった。

→めあてに沿った作戦を立てられるように、ボールを持っていない時の動き方に焦点化するなど、話し合いの視点を絞る必要があった。

●作戦を考えたが、遂行しきれていない。

●作戦のパターンを提示していたが活用できていなかった。

→提示した作戦は児童が考えたものと教師が紹介したものである。提示した作戦パターンから、協同的に話し合い、自分のチームにあった作戦を突き詰めていく。

●攻め側の作戦を重視していたため、守備側の作戦が立てられていなかった。

●チームドリルでの守備の意欲が低く、初めから数的優位を作る必然性がないように思えた。

→チームドリル、タスクは本ゲームに生かしているかを単元計画から考える必要がある。

本研究を通して、ボール運動の本質的な特性や魅力を踏まえ、適切な手立てを講じることで、話し合い活動が活発になり、ゲームに意欲的に取り組む児童が増えることが明らかになった。その反面、課題とめあての設定や主体的・対話的な話し合いのための手立てに加えて、ボール運動の本質的な特性や魅力を捉えさせるための手立て、パスやシュートなどの技能面を身に付けられるような声掛け、する・見る・支える・知る楽しさを感じられる工夫など、多くの課題と改善策も明らかとなった。今後も研究を続け、単元構想を立てる際には、今回の成果とともに課題も具体的にイメージしながら考えていく必要がある。

V 今後の課題

今回の研究授業では、香美・香南支部の研究主題「『楽しい できた またやりたい』～次への意欲をもって運動や仲間と豊かに関わろうとする子ども～」をもとに、授業を行った。研究主題から、児童の実態に合わせて、どのような領域でどのような力を身に付けさせるかを具体的に考え、身に付けさせるためにはどのようなゲームを行うかを考えることが必要であった。山本儀浩会長から、チーム全員がゴールを決める工夫を、全員で考えるという「共生」が狙いであり、学級全体の中での多様性を認めながら、チーム全員がゴールを決め、喜びや達成感を感じさせる体育授業を行う必要があるという助言をいただいた。また、「この授業では、どのような子ども達になってほしいか。」というイメージが具体的にねばなるほど、明確な狙いに沿った授業づくりを行うことができるという助言もいただいた。

今回の研究授業を通して、挙げられた課題を香美・香南支部でさらに研究し、県の研究主題である「子どもの 心に火をつける 体育授業」を行えるように、引き続いて研究を進めていきたい。